

季刊

青春本棚通信

vol.10 (2019年1月発行)

青春本棚通信



皆さんからのイラスト投稿待ってます！

あなたのオススメ本の紹介POPを作ってみませんか？

あなたのイチオシ本の紹介POPを作り、図書館に展示してみんなにPRしてみよう！

昨年、6月・7月・11月に開催した『青春☆POP作成会』を、今年も引き続き開催します。

開催日は、**1月19日(土曜日)**、**3月16日(土曜日)**の午後1時～5時まで。**事前申込み不要**です。当日は会場を出入自由に行っていますので、途中で入・退室できます。みなさんお気軽にご参加ください。

POPづくりに必要な道具は、一通り揃えていますので、**当日自分が紹介したい本を持って会場に来てください。漫画やライトノベルなどもOKです。**ただし、道具の数に限りがありますので、使いなれた筆記用具や画材をお持ちの方は、ぜひご持参ください。

なお、当日POPが完成しなかった場合、後日完成品を中央図書館の青春本棚に設置している「投稿ポスト」に投稿してもOKです。



～開催内容～

日時： **1月19日(土曜日)** 午後1時～5時まで

3月16日(土曜日) ”

※会場は出入自由。途中で入・退室できます。

場所：松山市立中央図書館 2階文化活動室

対象：年齢不問。小学生から大人までどなたでもOKです。

人数：各回6名程度(何回参加してもOK)

申込：事前申込みは不要。当日自由参加です。

◎POPで紹介したい本(漫画でもOK)をお持ちください。

◎使いなれた筆記用具や画材があればお持ちください。(なくても可)

『第5回中央図書館ビブリオバトル』結果発表！

10月28日、中学生・高校生による年に一度の知的書評合戦！「第5回松山市立中央図書館ビブリオバトル」が開催されました。

今回は、中学生1名・高校生8名の計9名のエントリーがありました。第1組5名・第2組4名でバトルを行い、2名のチャンプをかけたバトルが繰り広げられました。バトルひとりひとりが自分のイチオシ本を熱く紹介し、その熱意が交錯する素晴らしいバトルでした。いったい誰がチャンプの栄冠を勝ち取るのか、ワクワクさせられましたよ。

今回バトルが発表した本について、発表を聴いた青春本棚担当の感想を添えて紹介します。「バトルの皆さんは、学校の先生や友人以外に発表を聞いた人の感想をあまり聞いたことがないのでは？」と思い、少しでも参考になればと考えました。今後ビブリオバトルをする際に、役立てていただければ幸いです。「なんだか面白そうだな」「ビブリオバトルの練習になるかも」と思った皆さん、来年のエントリーをお待ちしていますので、ぜひ参加して下さい！

チャンプ紹介

第1組チャンプ

新田青雲中等教育学校（1年生）寅岡 美友さん

《紹介した本》『ヨーロッパ退屈日記』（伊丹 十三//著）

『お葬式』『マルサの女』などの作品で知られる映画監督・伊丹十三の著書。同氏は少年時代の一時期を松山で過ごした縁により、没後松山市東石井に「伊丹十三記念館」が設立されている。

さてこの著書は、昭和30年代後半に俳優を志す伊丹氏が渡欧した際のヨーロッパでの生活のさまざまな逸話を短文形式でまとめた作品である。そのテーマは、「映画」、「ファッション」、「車」、「食」など多岐にわたり、筆者独特の軽妙な話言葉で書かれ、当時のヨーロッパ文化があたり目に浮かぶように入ってくる。当時まだ映画監督ではなかった筆者の才能の一端が垣間見られる秀作。伊丹十三さんって本当にお洒落ですね。



（担当者の感想）常に笑顔を決やらず、本当に楽しそうに語るその姿が、多くの聴衆の目と耳を釘付けにしました。緊張して下を向くのではなく、前を向いて「楽しく語る」ことの大切さがよくわかります。ビブリオバトルで観衆を引き込むために重要な「熱さ」というものを体現したような発表でした。私はそれがチャンプを獲得できた一番大きな要因であったと思います。

最初に取り上げた内容が、老若男女を問わず興味を引きやすい「食」について、しかも洋食の定番であるスパゲティーについての一説であったことも素晴らしいです。「スパゲティーの正しい食べ方を知っていますか？」という導入で一気に聴衆を引き込んだように感じました。バトルとの対話を感じさせる「振り」というのも大切ですね。

寅岡さんが今後参考にすべきは、もう一人のチャンプ杉野さんの発表ではないかと思います。あなたの「熱さ」に杉野さんの「テクニック」が上手くミックスされれば、さらに良くなると思います。これからも頑張ってください！

第2組チャンプ

松山南高等学校（2年生）杉野 悠生さん

《紹介した本》『いなくなれ、群青』（河野 裕//著）

『サクラダリセットシリーズ』などで若年層を中心に人気のある河野裕さんの作品。「階段島シリーズ」と呼ばれる青春ミステリーシリーズの第1作目であり、現在第5作まで発売されている。

階段島（かいだんとう）——それは「捨てられた」人間が行き着く謎の島。本人には島に来たときの記憶が無く、「失くしたもの」を見つけなければ島から出ることはできない。この階段島での生活を受け入れ、「停滞」した日常を送っていた主人公の男子高校生・七草は、中学時代に思いを寄せていた幼馴染・真辺由宇との再会をきっかけに、ふたたび島の謎に迫っていくことになる。七草の肉体的な成長と共に階段島の秘密が少しずつ紐解かれていく。



（担当者の感想）前回チャンプの杉野さん、今回もお見事でした！終始落ち着いた語り口でありながら、ユーモアのきいた言葉の数々で知らず知らずのうちに引き込まれているというのが、あなたの特徴ですね。安易に「熱さ」を求める必要はないと思います。これが杉野さんの「味」ではないでしょうか。

しゃべるスピードも、声のトーンも安定していたので、途中で「あれ？どうした？」と思わせる場面がなく、安心して最後まで話の内容に耳を傾けることができました。これは杉野さんの構成力と発表に向けた練習に裏打ちされていると思っています。当日図書館でシリーズの2作目以降の本を借りてきて、それを発表内容に組み込んでいたようですが、構成と時間配分が頭に入っていないと出来ないのである。さらに素晴らしいのは、質問タイムへのさりげない導入です。発表時間の5分に加え、質問タイムの2分も活用しようとするその姿勢が、ビブリオバトルの本当の姿なのかもしれません。来年もディフェンディング・チャンピオンとして3連覇を目指すことを願っています！



参加バトラー ①

松山中央高等学校（2年生）田口 大夢さん

《紹介した本》『彩雲国物語』（雪乃 紗衣//著）

2003年から2011年まで刊行された本編18巻・外伝4巻からなる長編作品。実在しない架空の国「彩雲国」を舞台とした中華風の架空歴史ファンタジー小説である。女性に人気のPCゲーム「アンジェリーク」のキャラクターデザインを務めた由羅カイリの挿絵と当時めずらしい女性中心のストーリー展開が、女性を中心に読者の心を鷲掴みにし、アニメ化もされた。

名門家ながら貧乏生活を送っている女性・紅秀丽（こうしゅうれい）が、官吏になる夢を追い求め奮闘する物語。名君の才覚を持ちながら暗君を決め込む国王・紫劉輝（しりゅうき）と秀丽との出会いが、彩雲国の新たな歴史を紡いでいく――



（担当者の感想） 創作の歴史小説であること、秀丽と劉輝の人物像、アニメ化されたことなどを紹介し、情熱を持って作品の面白さを伝えようとする姿が印象的でした。トップバッターということで、緊張からか話に少しバラつきを感じてしまったのが残念、これからも頑張ってください。この作品は主人公の人生が描かれ、登場人物も多い歴史物語ですので、5分という短い時間での紹介となれば、人物紹介を秀丽と劉輝に限定し、少しのネタバレは覚悟のうえで、物語全体の縦軸（時間軸）をもう少し紹介すれば、2人の人物像も更に浮き彫りになって良かったのかなと思いました。またアニメが読むきっかけとこのことでしたので、表紙や挿絵、更には『彩雲国物語絵巻』（図書館所蔵あり）のようなアニメのビジュアル本を利用すれば、中華風の名前でイメージしにくい登場人物を、インパクトよく短時間で紹介できたかなと思いました。

松山南高等学校（1年生）東野 亨省さん

《紹介した本》『謎解きはディナーのあとで』（東川 篤哉//著）

『魔法使いマリィシリーズ』など、ユーモア溢れるミステリー作品を世に送り出している東川篤哉の代表作。同作品は現在シリーズが3巻まで発売されており、人気グループ「嵐」の櫻井翔と女優・北川景子の主演でTVドラマ化されている。

世界的企業グループの令嬢であり刑事でもある宝生麗子が遭遇した難解な事件を、彼女の執事・影山が、話を聞いただけで推理し、解決していくという安楽椅子探偵モノ。推理の面白さもさることながら、執事にもかわからず平気で麗子に毒舌・暴言を吐く影山や、迷？推理を連発する上司の風祭警部と麗子とのユーモア溢れるやり取りが秀逸な作品。



（担当者の感想） 麗子と影山の人物像や、1話完結の短編集であること、推理ポイントが分かりやすく引き込まれることを中心にした紹介でした。さらには「裁判員裁判の開始」や「殺人事件の時効廃止」など、発刊された当時の時事ネタを取り入れ、本への関心を引こうという意欲溢れる発表でした。今後もこの意欲を忘れずレベルアップして行って下さい。

この作品は著者の代表作と言える人気作ですので、紹介の仕方が難しいですね。こういった作品の紹介は「知っている人が多い」という印象を逆に利用するくらいの型にとらわれない大胆なアプローチも必要なのかなと感じました。

この作品の最大の持ち味はユーモア溢れるキャラクターたちですので、思い切ってその部分に重点を置き、例えば影山の毒舌や、風祭警部のバカさ加減などに着目した紹介をするのも面白いのではと思いました。

新田高等学校（1年生）樋ノ口 知輝さん

《紹介した本》『君と時計と嘘の塔』（綾崎 隼//著）

『蒼空時雨』や『ノーブルチルドレンシリーズ』など、恋愛を主題にしつつ、ミステリーの要素を併せ持つ作品を多く生み出している綾崎隼の作品。全4巻構成。サッカー好きで知られ、『レッドスワンの絶命』など高校サッカーの小説も書いている。

「密かに思いを寄せる少女・芹愛の死」という最悪な夢を見た高校生・綜士は、その朝教室で友人の一騎が、この世界から存在を消されてしまっていることに気づく。『時計部』なる怪しげな部活を作り、この現象の真相を追う千歳先輩と、同級生の雛美とともに、綜士はこの世界で起きているタイムリープ現象の謎を解明すべく動き始める。



（担当者の感想） この作品のキーであるタイムリープ（時間遡行）現象についてのあらましと、全4巻構成で巻を追うごとに、いつしか解決方法を夢中になって考えてしまう中毒性について語られ、とても興味深かったです。惜しかったのは、「物語が複雑である」「全4巻と長めの作品である」というマイナスイメージを素直に表現しすぎてしまったかなと感じたことです。特にこのようなSF要素のある作品は「この作品は複雑で長い」という印象を持たれない言葉を慎重に選んで話すことが求められるのではないかと思います。例えば、冒頭で「皆さん、タイムリープって何だか知ってますか？」という入り方をして言葉に馴染みのない人の気を引いてみたり、「1巻を読み終わると、もう絶対続きが読みたくなりますよ」という表現を使い、「長い」は禁句！くらいの心構えで望む必要があったのかなと思いました。

参加バトラー ②

済美平成中等教育学校（5年生）真鍋 光希 さん

《紹介した本》『また、同じ夢を見ていた』（住野 よる//著）

『君の隣をたべたい』『青くて痛くて脆い』などの作品で知られる若い世代を中心に人気の作家・住野よるの小説。自分は賢いが周りの同級生はほとんど馬鹿だと思っている自信過剰な小学生・奈ノ花は学校に友達がいらない。ある日、『幸せとは何か？』ということと「隣の席の子」と話し合う国語の授業が始まり、奈ノ花はひょんなことから知り合った高校生の「南さん」、風俗嬢の「アバズレさん」、お菓子作りが得意なやさしい「おばあちゃん」との交流を通して、その答えに近づいていく。夢と現実が交錯する中、奈ノ花と「隣の席の子」・桐生くんの未来の扉が開かれていく。

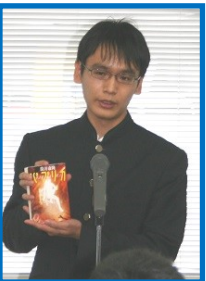
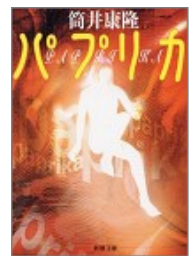


（担当者の感想）情熱という点では、チャンプの真岡さんと同じくらいの「熱さ」を感じましたよ。とても楽しい紹介でワクワクしました。これに構成力が加わればチャンプをとる日も近いと思います。まず、「これは面白いぞ」と思うネタをたくさん用意していたのではないかと思います。作品を愛するあまり「全部言ってやろう」と詰め込みすぎた印象がありました。一つ一つのネタは、切り口も斬新でユーモア溢れるものだったのですが、焦って少し早口になってしまっていたので、ゆっくり語ることが意識してみてもいいかなと思います。そのためには、語るポイントと順番を構成の「柱」にしておくことが重要だと思います。そうしておくことで、聞き手が聞きやすい「間」をとる時間的・心理的余裕が生まれてくるはずです。あと、必要以上にネタバレを気にしすぎたかな、もう少し物語の情報を出してもいいのかな、とも思いました。

松山城南高等学校（3年生）小澤 慧也 さん

《紹介した本》『パプリカ』（筒井 康隆//著）

『時をかける少女』『日本以外全部沈没』などのSF作品を多く生み出している作家・筒井康隆のSF小説。人が見る夢を解析し、夢に介入することで精神疾患を治療するPT治療が行われている近未来。精神医学研究所に勤める千葉敦子は、世界的なPT治療の第一人者でありながら、他人の夢に潜入して精神病を治療する「夢探偵パプリカ」という裏の顔を持っていた。最新のPT機器「DCミニ」が何者かに盗難・悪用され、他人の夢に強制介入して悪夢を見せ、精神を崩壊させる事件が起こりはじめる。敦子は犯人の正体・目的を突き止め、悪夢から抜け出す方法を探り始めるが――



（担当者の感想）2組目のトップバッターで緊張したでしょうが、とても落ち着いた雰囲気の声で聞きやすかったです。意識して「少しゆっくり過ぎるかな」くらいゆっくり話すと、もっと良くなると思います。SF小説の紹介は一筋縄では行かないですね。「SF＝難解」という先入観を吹っ飛ばす一手が必要なのかもしれません。アニメ映画化されたことにふれていましたが、このアニメはアメリカでかなり評価されているようで、アメリカの映画雑誌で大人向けアニメ映画ベスト8になったこともある隠れた良作なんですよ。ちなみに「パプリカ」より上の日本アニメは、「AKIRA」4位と「火垂るの墓」7位だけでした。アメリカ人に「WHY JAPANESE！パプリカを知らないのかい？日本人はアメリカ人に比べてSFを読む想像力が欠けてるぜ！HAHAHA！」とか言われたくなければ読もう！くらいのインパクトを最初に持ってくるのもいいかな。

新田高等学校（1年生）住田 萌華 さん

《紹介した本》『泣き虫しよったんの奇跡』（瀬川 晶司//著）

プロ棋士・瀬川晶司六段が自ら執筆した自伝。棋士として苦難の道を歩んだ筆者の前半生を記した作品。全国中学生選抜将棋選手権大会で優勝し、奨励会入りしたものの、結局年齢制限でプロ棋士になれず退会。弁護士を目指した大学生活を経てサラリーマンとなった瀬川氏が、その生活の中で将棋の楽しさに気づき、アマチュア棋士として戦い続け、遂にはプロ編入試験を受けてプロ棋士となるまでを綴った作品。2018年9月に松田龍平主演で映画化されており、将棋を知らない多くの人にも認知される作品である。



（担当者の感想）とてもやさしい声と表情で聞きやすい印象でした。良かったです。将棋に特に関心がない女子高生でも楽しめる作品だというインパクトは強かったのですが、SF作品と同じように、やはり「将棋界＝得体のしれない世界」という先入観の壁は高かったのでしょうか。この作品は筆者の半生を綴った自伝ですので、その人生・経験にふれることで、何かを学び取ることがこの本を読む一番の意義だと思うんですよ。実際将棋を知ってるか知らないかなんて関係ないんですよ。この部分をもっとアピールしても良かったのかなと思います。例えば、「私を変えてくれた本の中の名言」を交えて「この本を読んで自分はこう変わった」というエピソードの紹介など、本書の「あきらめなければ、夢は叶うんだ」というメッセージをもっと前面に出し、それを「将棋」というイメージよりも大きく見せたいといけなかったかなと思いました。